

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

AA 研共共課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究(2)ーミクロとマクロの視点から」

2023 年度第 3 回研究会（通算第 3 回目）

日時：2024 年 1 月 21 日（日）14:00-20:00

場所：AA 研 306

**概要**：2024 年 1 月 21 日（日）に 2023 年度の第 3 回の研究会を実施した。

当日は河野毅（東洋英和女学院大）によるインドネシアの直近に迫った大統領選挙とイスラームの関係等に関する研究報告と増野亜子（一橋大学）によるインドネシアのバリにおけるムスリムの芸能と現地の社会・宗教的背景に関する報告が行われ、またそれぞれの発表に対して参加者による質疑応答が実施された。それぞれの発表内容の概要は下記の通りである。

### **報告 1：「イスラームと民主主義：2024 年大統領選・議会選に向けたインドネシア」**

**河野毅（東洋英和女学院大）**

インドネシアのガバナンスを悩ませる三つの溝は継続している。第一に民族主義（世俗主義）とイスラーム主義の溝。独立当初からインドネシアの国是をめぐるイスラーム教に共づいた国是にするか、他宗教に考慮した国是にするかの議論は継続しており、現状は五つの国是である「パンチャシーラ」の第 1 条にある「唯一神」という文言で決着がついている。しかし、イスラーム教徒が 9 割を占めるインドネシア社会でイスラーム化という流れは継続し、特に政治勢力としてのイスラーム主義の力は形を変えて力を持つことは事実。これに対抗するのは民族主義（ナショナリズム）である。第二の溝は、ジャワと他地域の政治的・経済的な格差から発生する対抗意識である。独立当初から他地域からのジャワ中心主義に対する不満は継続しており、大統領選でも副大統領をジャワ以外から選ぶなど民主化時代は配慮がなされている。三つ目の格差は貧富の格差である。これは政治勢力としてはインドネシア共産党をはじめ左翼勢力として政党政治に参加した時代があったがそれ以降は貧困層を懐柔する方法で貧困層を取り入れてきた。

この報告では、イスラム主義の動向を中心に現在進行形のインドネシア大統領選へ向けた政治勢力を分析して説明する。宗教的行動の傾向としては以下の三つを提示する。

(1) 原理主義：国内法ではなくシャリーアに基づいた公私行動を強く要請するグループ。都市や近郊に居住。過激派は急進的行動（暴力とテロ含む）が加わるグループ。

(2) 近代主義：欧米にイスラムを使って追いつけ追い越せという意識が強い。商業主義。教育には自然科学を重視し通常は法人格の学校を経営。国際的な視点あり。パレスチナ問題など海外のイスラム教徒の状況を意識。ムハマディヤが典型。都市に居住が多く、組織としての上下関係や横の連携は弱い。

(3) 伝統主義：欧米との競争心は薄く現地意識が強い。ジャワに集中。大土地所有者であるイスラム導師（キアイと呼ばれる）が個人経営するイスラム寄宿塾が収入源。ナフダトゥール・ウラマ（NU、導師の覚醒）が典型。

このイスラム勢力を中心に、立候補している3候補を分析すると候補者番号①のアニス・バスウェダン（大統領候補）+ムハイミン・イスカンダル（副大統領候補）のペアが原理主義勢力と、近代主義勢力の一部と伝統主義勢力の一部の支持を受けている。候補者番号②プラボウォ・スビアント+ギブラン・ラカブミン・ラカは、組織票の強さとジョコ現大統領の長男を副大統領候補とすることで世論調査では先頭を走る。候補者番号③ガンジャル・プラノモ+マフッド MD は、大統領候補であるガンジャルが闘争民主党という民族主義の象徴的政党からの支持を受けていることから、イスラム法学者であるマフッドを副大統領候補とすることで、民族主義とイスラム主義のバランスをとった。

同時に、票田である各州へのアピールも重要である。インドネシアの選挙制度は票数が勝敗に直結するので、有権者の多い州を制することが候補者の課題となる。有権者が多い州は以下の通りである。北スマトラ州 1000 万、南スマトラ州 600 万、ランブン州 600 万、バンテン州 880 万、西ジャワ州 3570 万、ジャカルタ首都 820 万、中部ジャワ州 2800 万、東ジャワ州 3100 万、南スラウェシ州 600 万。

さらに、若年層も勝敗を左右する有権者層である。17 歳以上 40 歳未満が 7000 万人で、2 億 400 万人が総有権者数とのうち 1 億 7000 万（85%）が投票する予想すると、各候補は 5900 万の若者を取り込む必要がある。若者層は、政治に無関心な層でもあり、予測できない事態を起こす層であることも留意が必要だ。若者層を取り込むためにジョコ大統領の長男ギブランを副大統領候補に入れたプラボウォの戦略がある。一方、マフッドを入れても自分が若者層に支持されていると考えるガンジャルがいる。そしてムハイミンを副大統領に入れてスハルト退陣を主導した学生運動を全面に出して若者にアピールするアニス候補。各候補とも SNS を使った広報に暇が無い。

最後に、冷笑的な見方を紹介したい。まず、全ての候補は操り人形であるという見方である。アニスはメディア産業の重鎮であるスルヤ・パロの操り人形だという見方。これには異論もあり、スルヤ・パロだけでは勝てないため副大統領候補に伝統主義勢力の若手リーダーであるムハイミンをつけたというものである。次は、プラボウォはジョコ大統領の操り人形

であるという見方である。これには信憑性があり、ジョコ大統領の長男を副大統領候補につけたことからわかる。最後にガンジャルはメガワティ第5代大統領兼闘争民主党党首の操り人形であるという見方である。この点については、ガンジャル候補から闘争民主党を引けば政治勢力は激しく減少することから一理あることがわかる。二つ目の冷笑的な見方は、インドネシア政治は政治エリートが支配するため政党政治はほとんど意味がないという見方である。例えば、プラボウォとスハルト家族の関係は継続しており、スハルト政治体制下で成長したゴルカル党、プラボウォと国軍関係者が設立したグリンドラの強い資金力を背景にスハルト時代を懐かしむ国民にアピールしている。これに対抗するのは闘争民主党を前面に出すスカルノ家だが、メガワティ党首以外にリーダーが不在である。となると、ジョコ大統領が築き上げた政治エリートが、プラボウォとスハルト勢力と合流することで、一大政治勢力になる可能性がある。

これら冷笑的な見方は、前記のイスラム勢力の政治性と若者層の政治性を加味していないため、2月14日の投票結果では、どのペアも絶対多数を取ることができなくなる可能性があり、6月の決選投票に持ち込まれる可能性がある。

質疑応答では以下のような点に関して質疑が実施された：イスラム原理主義という表現の仕方は中東研究で使われるコンテキストに合致するか疑問。インドネシアの世論調査の信用度は高いのか。若者層の政治意識を理解するための社会科学的手法として有用なツールはあるか。イスラム教のトランスナショナルな性格が選挙にどう影響するか。

## 報告2:「ネットワーク構築としての芸能活動—バリ島の宗教的マイノリティとしてのムスリムの事例から」 増野亜子(一ツ橋大学)

インドネシア・バリ島において、ムスリムは宗教的マイノリティである。しかし数百年にわたる歴史を持つムスリム集落もバリ島各地に点在しており、そこではバリ語を話し、バリ社会に根を張って暮らす人々が、独自の信仰と文化を継承している。彼らの民族的なルーツはササク系、ムラユー系、ジャワ系、ブギス系など多岐にわたるが、集落の歴史的背景を語る際には、地元の王宮や僧侶等の有力者との固有の関係性がしばしば強調される。

発表者はバリのムスリム集落において、詩の朗読や舞踊伴奏等に用いられる杵太鼓類(ルバナ rebana、ターレ tar、クندان kendang 等と呼ばれ、構造や名称は様々)の演奏実践を調査してきた。杵太鼓はバリのヒンドゥー教徒の太鼓とは形状も異なり、ヒンドゥー教徒はほとんど演奏しないことから、ムスリム固有の楽器とみなされている。杵太鼓演奏をはじめとするムスリムの音楽や芸能は、ムスリム集落内だけでなく、ヒンドゥー教徒の王宮や僧侶階級の儀礼においてもたびたび上演され、ムスリム集落とヒンドゥー教徒コミュニティの関係性を構築し、維持する上で重要な役割を担ってきたと考えられる。発表では次の事例を紹介した。

(a) 東バリ・カランガッサム県ニュリン集落(ササク系)では、王宮からの依頼に応じて杵太鼓合奏を行う慣習があった。彼らの音楽には、民族的ルーツであるロンボク島の音楽との連続性だけでな

く、ヒンドゥー教徒のガムランの影響が強く見られる。但し、現在は残念ながら演奏が途絶した。

(b) 南バリ・デンパサール市内のクパオン集落(ジャワ・ブギス・パレンバン系混淆)は、プメチュタン王宮の儀礼で、たびたび男性群舞ルダットを踊ってきた。ルダットは武術やミリタリズムと結びついた祝祭の舞踊で、かつて王宮の警護を担ったムスリム兵士のイメージとしばしば重ね合わされている。

(c) 東バリ・カラングッサム県サレンジャワ集落(ジャワ系)は、隣接するブダクリン村の僧侶の火葬儀礼に参加し、杵太鼓を演奏する習慣がある。

このような従来からの慣習に基づく実践に加えて、ここ 10 年以内に開始した比較的新しい例に以下のものがある。

(d) 東バリ・カラングッサム県シンドゥ集落(ササク系)のルダットは、2016 年に地元王宮の火葬儀礼に招待され、ヒンドゥー教徒の楽団や参列者とともに行列を行った。この事例は宗教の差異を超えた包摂と寛容の象徴としてメディアに取り上げられた。

(e) 2015 年の西バリ・ヌガラ市の記念日パレードにはムスリム楽団が複数参加した他、ヒンドゥー教徒とムスリムの両者がともに特徴的な衣装で並んで行進したり、ヒンドゥー教徒のガムラン音楽とムスリムの杵太鼓が共演したりする事例も見られた。

旧王宮の儀礼は地域全体の一大イベントであり、こうした場での芸能上演はムスリムにとって、地域社会への貢献とマジョリティであるヒンドゥー教徒との協働の場になっている。人目を惹く芸能や音楽は、マイノリティであるムスリムが自らの存在を可視化し、文化的独自性を表す機会でもあり、またヒンドゥー教徒の主催者にとっても、両者の共生を確認し、アピールする意味を持つ。特にクタでのテロ事件以降のバリ社会では宗教的対立を回避し、連帯の姿勢を内外に示すことが必要になっており、公の場でのムスリムとヒンドゥー教徒の共演は、共生のシンボルとして重要性を持つようになった。とはいえ、ムスリムとヒンドゥー教徒の芸能には明らかな不均等性がある。ムスリム芸能の公の場での上演機会は限られており、フェスティバル等の行事でもほぼ常にヒンドゥー教徒がイニシアティブを持っている。またムスリムの行事でヒンドゥー教徒の芸能が上演される事例はほとんどない。

質疑応答では、宗教的マイノリティとしてのムスリムの社会的位置づけに関して、コメントと質問が寄せられた。バリのムスリム全体の中で「バリ人」アイデンティティをもつ人がどのくらいの割合を占めるかという質問があったが、統計資料はなく全体像の把握は困難である。ただし古い歴史のある集落では特に、民族的出自(ジャワ、ササク等)よりもむしろ、祖父の代からの居住地であるバリ社会に帰属意識を持つ人が一定数いることは重要だと考えられる。またバリのムスリムに限らず、マイノリティ一般にとって、有力者や地域社会に自らの存在を「認知される(akui)」ことに大きな意味があるという指摘、ジャカルタのバリ人社会のように宗教的人口比が逆転している事例では、マイノリティであるヒンドゥー教徒の側が、マジョリティであるムスリムに対して配慮しながら芸能を実践しているという指摘もあった。

(以上終わり)